共同運営部門：心臓・血管センター

ー関係部署ー

循環器内科
心臓血管外科
7階山側病棟、ICU・CCU
臨床工学科
地域医療連携室
薬剤部門
リハビリテーションセンター

ー概要ー

2002年に開設となった心臓センターは、20年目を迎えた昨年、名称を心臓・血管センターとした。開設当初より循環器内科、心臓血管外科の両診療科によってこれを構成し、当院における循環器系疾患の診療にあたってきた。特に併設の泉州救命救急センターに搬送される急性冠症候群（不安定狭心症、急性心筋梗塞）や急性大動脈症候群（大動脈解離、大動脈瘤破裂）、重症心不全や重症不整脈などに対しては、当直医を常駐し24時間体制で対応している。昨今ではそれら両診療科に加え、看護師（病棟・ICU看護師、慢性心不全看護認定看護師）、臨床工学技士、検査技師、リハビリテーション技師、薬剤師、MSWなどの多職種が参加、連携して、初診から退院、あるいは退院後の外来フォローに至るまで、包括的かつ合理的にケアに当たっている。また、高齢心不全患者に繰り返しACPを行い、循環器疾患の複雑かつ多様な治療選択ができるよう医療チームで介入している。

2020年からは泉佐野泉南医師会とともに「泉州多職種地域連携プロジェクト」を立ち上げ、「心不全手帳」や「心不全冊子」を作成し、地域全体で心不全患者家族を支援していく体制を構築している。

ー実績ー

両診療科の臨床実績（2022/1/1～12/31）は、循環器内科では心臓カテーテル検査976件、冠動脈カテーテル治療426件、ペースメーカー植え込み61件、カテーテルアブレーション121件、下肢動脈カテーテル治療60件などであり、いずれも昨年に続いて、さらに症例数の増加を果たした。心臓血管外科は154件の手術室手術を行い、内訳は冠動脈疾患15例、弁膜症60例、胸部大動脈瘤21例、腹部大動脈瘤23例、末梢血管19例などであった。そのうち開心術は103例と増加し、100例を突破した。今年度は右小開胸による低侵襲手術（MICS手術）を、僧帽弁形成に加え大動脈弁置換にも拡大した。今年度も循環器内科、心臓血管外科とも泉州地域の救急患者を積極的に受け入れ、りんくうICU/CCUの年間患者の増加に貢献し、延べ3,219例のうち、93.5％が心臓・血管センター関連の患者であった。

また慢性心不全看護認定看護師を中心として、院内他科に入院中の潜在的心不全患者に対する心不全ラウンドや、年間約200件の心不全外来、家族も交えた退院後支援を視野に行う年間約100件の退院前カンファレンスなどを実施している。

ー今年度の成果と反省点ー

上述した通り、循環器内科は心臓カテーテル検査及び治療件数やカテーテルアブレーション件数の増加を維持したことが成果である。また心臓血管外科は開心術の増加とMICS手術の適応拡大が今年度の大きな成果である。院内多職種が会しての、心臓・血管センター合同カンファレンスを毎週水曜日朝に開催し、問題症例を中心に議論を行っており、今年度も引き続き行ってきた。また心不全地域連携プロジェクトでは、第3回目となる集会をWeb・現地ハイブリッドで実施した。

一方反省点としては、重症患者の増加や、特にコロナ禍ではその病床確保の影響を受けてのりんくうICU後方ベッドの不足などから、循環器救急の停止時間が長くなり、応需できない地域の循環器救急症例がやや多く存在したことである。

ー来年度への抱負ー

両診療科においては引き続き活発な診療実績を挙げていくとともに、冠動脈や心不全、大動脈疾患の救急搬送に対してこれまで以上に積極的に取り組んでいく。また院内多職種連携をさらに強化し、前方後方支援を含めた循環器疾患の治療体系をより強固に構築していきたい。院外においては、多職種を交えた心不全の包括的医療・ケアの連携を深めていきたい。また、診療局看護局が連携して ICUの後方ベッドの捻出、確保に努め、これをもって循環器救急停止時間の短縮化を図っていきたい。